

C O R R E N T E

Centro Culturale Italo-Giapponese

ローマで双子育児⑳

浅田 朋子

双子の娘たちは10歳になった。ある日、双子が「私たちも、もうすぐ矯正するの?」と聞いてきた。

小学校のクラスのお友達は、4分の1が歯の矯正を始めている。イタリアではだいたい子供の歯科矯正は、乳歯がほぼ抜けたタイミングで始めることが多いので、小学校高学年から中学生の間に始める子供が多い。

矯正のタイプは「ワイヤー矯正」か「マウスピース矯正」である。ワイヤー矯正は歯の表面(もしくは裏側)に器具とワイヤーをつけて歯を動かす。マウスピース矯正は透明で目立ちにくいマウスピース型の矯正装置を使う。治療段階に合わせて、形の異なったマウスピースを装着していき、少しずつ歯を動かしていく。クラスの子供の矯正のタイプは半々といったところだ。

誰よりもいち早く矯正を始めたアレッサンドロは、誇らしげにマウスピースを皆に見せ「ママが、高いから絶対なくしちゃダメだって」と言い、給食の時など、マウスピースを外した際に入れておく容器を首からぶら下げていた。それにもかかわらず、2日後にマウスピースを失くすという大失態を犯し、母親にきつく叱られ泣いていた。「首から入れ物ぶら下げてんのに、なくすんやなあ。。。」と鼻で笑いつつも、他人事ではない。娘たちの「うっかり忘れ」も相当なものである。放課後に「マウスピースを忘れたんです!!」と血相を変えた母親が学校に来るのは日常茶飯事である。



【双子のクラスの毎年恒例のクリスマス飾り
(本文とは関係ありません)】

さて、双子もだいたい乳歯が抜けたので、私たちがいつも通う歯科医院の予約をとった。義父母が昔から通う医院で、私も何回か歯の詰め物が取れた時などに通院した。医院長はクラウディオ

先生という60代の開業医で、性格は温厚、楽しく朗らかでとっても良い人だ。グレーヘアがなかなか渋い男前である。私が出産した時にかかっていた産婦人科医も男前だが、彼はチャラっとしていて女性関係が派手な感じだった。同じ男前でも、クラウディオは美人の奥さん一筋の愛妻家、あの産婦人科医と違い、そういうところは大変好感が持てる。

クラウディオ先生は医院に行くといつも満面の笑みで「Ciao～tesoro, come stai?」とぎゅう～とハグしてくる。たいてい義父と同じ日に予約をとって一緒に行くのだが、いつもこの二人のおしゃべりが止まらない。私の治療中も、サッカーの試合に始まり、家の暖房が壊れた、近所のパールが閉店した、友人宅での夕食のメニューがイマイチだった、などなど、ほとんどがどうでもいいような内容なのだが、ずーっと喋り続けている。

今までのイタリアでの経験上「黙って治療する」という医者にはほとんど出くわしたことはない。しかも、こんなにおしゃべりなのに、治療に関する説明はほぼなく、「ok, iniziamo!」と言って、どんどん進めていく。

日本では歯科医院で歯科助手がいないところは見たことがないが、クラウディオに助手はいない。簡単な準備やベットの消毒等は受付の人がやるが、治療中は彼一人なので、たまに「ちょっと、これ持ってて」と、あの口内の唾液を吸いとる機械を持たされたりする。

最初に彼の治療を受けた時は不安でしょうがなかったが、実はとても評判のいい優秀な歯科医なのである。治療が終わり「どうですか?」と聞くと「Ottimo!」の一言と、頭を撫でられ終了。私、もう49歳やねんけどな・頭ナデナデはこの歳でなかなか巡り合わない体験である。

予約日、夫と双子を連れて初めての診察に行った。「痛くない?」と少し不安そうだったが、「最初は歯の様子を見るだけで、何もしないとすよ」というと、少し安心したようだった。事前に「ortopanoramica(口腔のパノラレントゲン写真)」を指定されたクリニックで撮影してくるよう言われていたので、レントゲン写真も持参した。

「Ciao～tesori!!」とクラウディオがいつも以上の満面の笑みで双子を出迎えた。「なんて可愛い

んだ、さあさあ、こっちにおいで!!」とクラウディオは双子の手を引いて診察室に連れて行った。

診察室には矯正歯科の先生が座っていた。矯正はこの専門の先生が月に一度、クラウディオの医院に来院して診察してくれる。その先生を見て、明るいクラウディオの雰囲気になんか少し緊張がほぐれていた双子の表情が、再び固まった。クラウディオと同じ歳くらいの眼光鋭い痩せ型の先生は、腕を組んで椅子にどっかりと腰掛け、双子をじっと見ると、マスク越しにくぐもった低い声で「Buonasera」と言った。あかん、これは…。チラリと双子を見ると、クラウディオの横で直立不動のまま固まっている。

先生は双子のあごを急にぐっと掴むと、「あごが小さいな…」と呟いた。な、何なんや、まるで警察の取調べみたいやんか、この威圧感…。「ちいさいんだよ～！だから可愛いんじゃないか～」とクラウディオはチュッと双子の頭にキスをした。二人の先生のあまりの極端な違いにどう対応していいかわからず、双子は固まったままである。

「どっちから始める…?」先生は、バン！と診察ベッドを叩いた。いや、これどう見ても「落しの鬼刑事」の取調べが始まるみたいやん。双子が固まったまましていると、クラウディオがサイコパスのマフィアナンバー2みたいな感じで「じゃ～～～、この子から!」と双子の一人をドンッと押した。娘は、よろよろとベッドの上に寝そべった。「Apri la bocca(口を開けて)」の言い方、声のトーンは、「今回も完落ちさせてやる」という強い自信を感じる。

夫を見ると子ウサギのように怯えた表情をしている。歯医者さんが嫌いな夫には、この先生は鬼にしか見えないのだろう。

歯並びや歯の状態をじっくり見た後、レントゲン写真を見て「あごの小ささに比べて歯が大きいけど、大きな問題はない。まあ、一般的な矯正のスケジュールで治療できるだろう。2年だ。ただ、この子の場合ワイヤー矯正でないとダメだ」と言った。先生は双子を見ると「わかったな、ワイヤーだぞ。おもちゃみたいなマウスピースは必要ない」とニヤリと笑い、娘はすぐさまコクコクと頷いた。チャカを使うか…というくらいの勢いである。ここは歯

科医院で、しかもイタリアなんだけど、なんだろう、この昭和の任侠映画感。頭の中で岩下志麻が「あほんだら、撃てるもんなら、撃ってみい！！」と凄んでいる。と、しょうもないことを考えている間に「次！！」と先生が、バンッとベッドを叩いた。双子のもう片方が寝そべると「あれれ、さっきもう診察したよね～？」とクラウドディオが冗談を言ったが、笑うものなし。双子ネタ、今は必要ないねん。

先生はさっきの娘よりじっくりと診察し、レントゲン写真をじーっと見つめていた。「チツ」と先生が舌打ちをした。新たな証拠か？な、何があった…。先生はクラウドディオに「これを見ろ」とレントゲン写真を見せた。怖い、怖すぎる…。「犬歯が左右一本ずつ奥に入り込んでしまっている。うまく下がってきて生えてくるように場所を先に作ってやらないといけない。全体の矯正の前にまずはこれを解決しないといけないから、一年矯正期間が伸びる。3年だな」と言った。「もし1年でうまく降りて来なかったら、外科手術をすることになる。」「え！手術ですか？」と私がびっくりして聞くと、さっきまで怯えていた夫が「僕も子供の時にその手術をしました」と言った。手術自体は難しいものではないらしい。

「まあ、うまくいくように期待しよう！！」とクラウドディオが明るく笑った。あんた、ええな、ポジティブで。心配性の私は先生に「どれくらいの確率で手術になりそうなんですかね…」と聞いたが、「やってみないと、わからん」と冷たく返された。クラウドディオが「日本人って、本当に先のことばかり心配するよね～。矯正の先生にかかっているんだから何の心配もないよ！大丈夫、うまくいく！」と太鼓判を押した。いや、そういうイタリア人を信じてこっちは何度となく痛い目を見てるねん。

でも確かに、イタリアという国は、ここぞというときは、最後にどうにか辻褄を合わせてくる。予定もクソもなくガッチャガチャで「もう、なんやねん！！どうなるんやろ…」となるのだが、気づくと最後は物事が収まっているという、不思議な国なのである。

「さ、もういいよ」と刑事先生に言われたが、娘が「この歯がちょっと痛い」と訴えた。「うん？歯が痛いのか？」と先生が見ると、抜けそうになっている乳歯が、他の歯に当たって痛みが出ているようであった。「もうほぼ抜けかけているな。抜こうか」

というや否や、先生は娘の顔をグッと押さえて、「ボリッ」と手で抜いてしまった。私はあまりのことに唖然としていたが、意外にも娘は泣きもせずスッキリした表情だ。手で抜いたので…。「だ、大丈夫！？」と聞くと、娘は「うん、大丈夫！」と笑った。以前ならびっくりして泣き出しただろうが、娘も大きくなったものである。先生は娘の頬をチョンと触り「Bravissima」とニコリと笑った。娘はとても誇らしそうにはにかんだ。

歯科医院の帰り道、娘が「はい、パパ！」と先生が抜いてくれた乳歯を渡した。先生が帰り際にティッシュに包んで渡してくれたのだ。夫はその乳歯を見て「あの小さな赤ちゃんだった双子が、矯正するくらいに大きくなったんだなあ」としみじみと言った。



【ローマの消防署のクリスマスイルミネーション
(本文とは関係ありません)】

(元当館語学受講生)

おはなしを焼く《かまど》

竹田 理乃

冷えは万病の元といいます。誰のことばか知りませんが、これについてはイタリアを代表する児童文学作家のひとりであるジャンニ・ロダリー先生も、唇を引き結んで深く頷いてくださるでしょう。

父のことでおぼえている最後の姿は、かまどにもたれて背中を暖めようとむなしい努力をしている男の姿だった。父はびしょぬれで、ふるえていた。水たまりにとり残された小猫を助けようと嵐の中を外に出たのである。それから七日後に、気管支肺炎で死んだ。あのころはペニシリンはまだなかった。

ロダリーが『ファンタジーの文法』の〈21. 再話〉で描いた、幼くして訪れた父親との別れのくだりを読むと、あまりの寒々しさに肩が震えます。父親はパン職人で、その作業場には粉袋が山と積んであり、生地を捏ねる機械やかまどがあったこと、そこで売りものにするためのたくさんのパンを焼いていたこと、それとは別に、食べ盛りの愛息子たちのために特別なレシピでパンを焼いてくれたことが慕わしく描かれている一方で、ロダリーは父の姿について「手は覚えているが、顔は覚えていない」とも書いています。落ちた髪がパンに紛れ込まないように、火のついた新聞紙で髪を焼いていたことも、その新聞が子ども向けのページがあるガゼッタ・デル・ポーポロだったことも覚えているのに、小猫を救って命を落とした優しい父親の顔は覚えていられなかった9歳の男の子が暮らした家は、今も彼の故郷であるオマーニャに残されています。

オマーニャはミラノよりもっと北にある、オルタ湖とアルプス山脈のあいだの小さな街です。まだ

夏の気配が残る9月に訪れても、急に冷えた夕暮れには買ったばかりのセーターを引っぱり出さなくては耐えられなかったほどの寒いところでした。こんなところで、まだペニシリンもないのに、小さな命を助けるために雨の下へ出ていく父の姿だけはその目に焼きつけることのできたジャンニ少年は、やがてナチス支配下のドイツから逃れてきたユダヤ人の子どもたちの授業を引き受けてロダリー先生になり、動員を拒否してファシストと戦うレジスタンスの一員になり、新聞記者を経て、やがて児童小説作家ジャンニ・ロダリーとして世界的な名声を手にするに至りました。



【オマーニャの窓辺】

この父親が小猫を救うエピソードが差し挿まれている〈21. 再話〉の章で、ロダリーはタイトルのとおり彼が〈再話のあそび〉と呼ぶ創作の手法を紹介しています。再話というのは、民話やおとぎ話などを書き直すことで、たとえば「竹取物語」を読もうと思えば中学校で古典を習うまで難しいですが、これが再話された「かぐやひめ」の絵本となると小学生でも楽しめるようになるというような、おはなしを再構成する作業のことを指します。ここでは、ジェイムズ・ジョイスがギリシア古典の叙事

詩「オデュッセイア」から小説「ユリシーズ」を生み出したことや、ロダーリ自身が「シンデレラ」の民話を短編「ヴィーナスグリーンの瞳のミス・スペースユニバース」へ変身させたことが言及されているので、このあそびは再話というより翻案と呼んでもよさそうでもあります。翻案といえば、芥川龍之介はその名手で、夏目漱石が絶賛した初期の作品「鼻」やよく国語科の教材に採用されている「羅生門」は、宇治拾遺物語や今昔物語に題材となったおはなしが載っていますし、なんだか難しそうな単語ではありますが、ちょっと本が好きな人ならだいたいどなたさまも触れたことのある手法でしょう。



【トリエステのジョイス像】

でも、自分でやってみようとするれば、どうすればいいのでしょうか。

たとえば「ヘンゼルとグレーテル」でく再話のあそびをするならば、まずロダーリはこのお話の骨組みをここまで分解します。

A と B は場所 C で道に迷う。かれらは D によって、ある場所 E につれて行かれる。そこにはかまど F もある……

この筋書きから、イタリア南部からミラノに移民してきた一家の父親が家族を養っていけなくなってしまい、ふたりの子ども(A と B)を大聖堂(場所 C)に置き去りにして……という風に、新しいおはなしの火花を散らしてみようというのがく再話のあそびの趣旨です。ここでロダーリはく抽出作業のどの点まできたとき、ひらめきが浮かび、新しい

物語を生み出すのに必要なエネルギーが動き出したかと問われれば、即座に《かまど》であると答えよう)と強調します。ロダーリが A と B に代入した子どもたちを見つけるのは、森の奥に子どもを焼き上げるためのかまどを持つ腹ペコの恐ろしい魔女ではなく、街の人たちの空腹を満たすために早起きして働くパン焼き職人(D)であり、子どもたちをまだ温かいかまど(かまど F)の近く(ある場所 E)へ連れて帰る彼は、冷たい雨から小猫を助けたロダーリの父親の思い出と繋がっています。

世の中に似通った骨組みを持つおはなしはいろいろありますが、ロダーリがく人ががちがえば、《再話》もちがった道をとると述べているように、同じ題材で筆を執ってもその表現や内容には違いが生まれます。作家個人の経験に根差すこの違いは、読者がある作品を愛したり愛さなかったりする理由のひとつであるように思われます。

私に日本近代文学を教えてくれた先生は、菊池寛の短編小説がお好きでした。先生の授業がおもしろかったのでいくつか短編を読んでみたあと、エッセイ「小説家たらんとする青年に与う」の冒頭に掲げられた〈二十五歳未満の者、小説を書くべからず〉なんていうルールに衝突して反感を覚えたとき、たしか私は19歳だったはずです。べつに小説なんて書いちゃいけないけど、今の私じゃダメですかと不愉快でした。だって19歳といえばまだぎりぎりティーンエイジャーで、おとなになりきれない心身に軋みを感じていたり、進学や就職で新しい場所に進んでから洪水のように浴びてきた情報を処理しようと苦戦していたり、ぐるぐると悩むお年頃です。そんな苦しいところへくどんなものでも、自分自身、独特の哲学といったものを持つことが必要だと思う。それが出来るまでは、小説を書いたって、ただの遊戯に過ぎないと思う)だなんて、今ここに感じている鮮やかなものを文章にしても無価値だなんて言い切られちゃったら、なんだか傷つくじゃないですか。文学好きなら拗ねたって仕方ないと思います。

私の頭のなかに引っかかっていたうろ覚えの菊池ルールに則ると、小さな子どもに創作をさせるロダーリは25歳まで矯めておくべき才能を空費していることになります。そこでこの度、ひとつ敬

愛するロダリー先生を弁護してみようと思い、まずは敵を知れとばかりに読み返してみたところ、余計なお世話だったことに気づきました。

すっかり忘れていましたが、そもそも菊池はく尤も、遊戯として、文芸に親しむ人や、或は又、趣味として、これを愛する人達は、よし十七八で小説を書こうが、二十歳で創作をしようが、それはその人の勝手である」と述べています。ロダリーだって『ファンタジーの文法』の冒頭で《ことばの使い方のすべてをすべての人に》、これこそつくしい民主的ひびきをもった素晴らしいモットーだとわたしは思う。だれもが芸術家であるからではなく、だれもが奴隷ではないからである」としているのですから、彼が教え子として想定しているのは職業作家ではなく、むしろ遊戯として、趣味として、文芸に親しみこれを愛する人たちです。

さらに、作者の日々の生活や思い出こそが創作活動に豊かさを与えるのだという主張においては、ロダリーと菊池の意見はそれなりに一致しています。ロダリーが『再話のあそび』の解説のなかで取り上げた父親の思い出と深く結びつくかまどの存在は、菊池がくその作者の人生観が、世の中の事に触れ、折に触れて、表われ出たものが小説なのである」とした、小説の要として機能する人生観の土台となった経験の象徴です。

そういえば、ロダリーも菊池も作家として成功する前に、世の中に触れ、いろいろと見聞きして書くことを仕事とする新聞記者としてのキャリアを積んでいます。菊池ルールにカチンときていた頃の私といえば、まだイタリア語は半過去の活用も覚えきっていませんでしたし、二十歳の誕生日に初めての海外旅行に出発し、テルミニ駅の本屋さんで『パパの電話を待ちながら』を買うまでロダリーのことも知りませんでした。当然ながら、当時の私ではこのコラムを書くことはできません。書いたり話したりする〈あそび〉をより楽しみたいのなら、おはなしの《かまど》の火を落とさないよう、楽しいことも悲しいこともなんだって、頭と心に蓄えておきたいものです。



【ファンタジーの文法】

<参考文献>

Rodari Gianni, 2013, *Grammatica della fantasia*, Einaudi Ragazzi.

『ファンタジーの文法』 窪田富男訳、筑摩書房、1990年

『猫とともに去りぬ』 関口英子訳、光文社、2006年

『小説家たらんとする青年に与う』 菊池寛、講談社、1987年

(元当館語学講師)

編集・発行 / (公財) 日本イタリア会館
〒606-8302 京都市左京区吉田牛の宮町 4
TEL: (075) 761-4356/FAX: (075) 761-4357
E-mail: centro@italiakaikan.jp
URL: <http://italiakaikan.jp/>